

■ 寄稿

平和の神学的意味

新しい平和意識への刺激

オイゲン・ビーザー

山崎達也 訳

『ルカ福音書』においては、イエスの生涯は、平和の告知すなわちイエスが誕生する際に天使たちが歌う「いま地に平和を」で始まる。しかしイエスがエルサレムに入城する際には、熱狂する群衆は「天には平和、いと高きところには栄光」と叫ぶ。聖夜に地に降り立った平和は、神の子が拒絶された後、彼が生まれたところであらたに消えてなくなってしまうのである。それはまた、霧のように消えてなくなってしまう夢物語について語っているようにも思える。

今日においても、状況はまったく同じである。東西

紛争が終結し、あの鉄のカーテンが開けられたことで多くの人々を自由へと導いた世界が開かれても、世界平和は依然として達成されたことはないといえる。しかしながら、数世紀にわたって、血で血を洗う宗教戦争、略奪戦争、殲滅戦争を経験してきたヨーロッパの諸民族は、ヨーロッパという共同の家を建てることを決心した。そのことによって、最悪の戦場であった、まさにその宗教の真っ只中において、平和の城郭が築き上げられたのであった。当然、その城郭に対しては、争いによって引き裂かれた全世界を囲うであろうこと

が期待された。しかしこの平和への希望は、昨年の九月十一日のテロ攻撃に対するアメリカの報復によって、深刻な後退を余儀なくされてしまった。この後退から平和への希望の松明をふたたび掲げるためには、ただ心と精神の力を振り絞ることしかないように思える。その一環として不可欠なことは第一に、平和とはいったい何なのかという問いを吟味することである。

一 平和とは何か

この問いに対して、三つのモチーフで以てその答えにアプローチしてみたい。すなわち、意味の圧力・事実の圧力・苦の圧力である。まず第一にあげなければならぬのは意味の圧力である。というのは、第二次世界大戦後、不十分ではあったが、平和とは何かという主題に対して新たに考えようとする動きがあったからである。その理由は、伝染病が流行したことを除いて、二つの世界大戦およびそれらに関する地域紛争が行われたこの百年間ほど、大量の人々が死ぬという現実人類が一度も直面したことがなかったからであ

り、それだけいつそう、平和という主題が差し迫ったものとなったからであった。しかし、この恐怖の時代を経験した後でも言葉は乱暴に使用され、言葉の本質も見失われたことで、死の意味についてよく考えられることはなかったし、その結果として平和の意味も十分に吟味されることはなかった。その当時の神学は、このような緊迫した問題に立ち入ることをまったく疎かにしてしまった。そこで、教会の職務に就いている者が自らの職務を差し置いて、この問題に取り組むために、イニシアチブを取り、法皇ヨハネス二十三世は一九六三年四月十一日、回勅『地に平和を』(Pace in terra)を公にしたのである。このなかで法皇は、核兵器時代が有する殲滅する力という条件のもとでは、戦争を政治的あるいは経済的争いの解決としてみなすことはもはやできないという考えを宣揚した。

しかしそれと同時に、平和は空想の世界へ閉じこもってしまったかのように思えた。すなわちあらゆる人道的進歩は結局のところ、「科学革命」の途上に依然としてあるのであって、それを対象として認識すること

はできないし、またそれは並大抵のことではないと受け取られたというわけである。また古代の奴隷制度、神の裁定と刑事司法の手段としての拷問、そして投石、磔、火刑のかたちでの処刑ということに関しても同様である。もしもイスラム教が今日、この極端なかたちでこのようなことに戻るとしたならば、それは、キリスト教が前世紀において啓蒙とヒューマニズムを継続的に推し進めてきたことが、イスラム教にはなかったという証明になる。しかしだからといって、大部分のキリスト教徒も、人間の尊厳と両立しない死刑をいかにするかを考えなければならない。なぜならば、そうしてはじめて、平和の回勅の根本思想が世界的に承認されるための前提が与えられるからであり、そのことによって、近代的な殲滅戦争というかたちでの大量虐殺が現代的な条件のもとで「ありえない夢物語」であると思なされることになるからである。

この意味の圧力に固く結び付けられるのが事実の圧力である。なお、この事実の圧力に関しては、それがよく考えられた末に圧迫であることが自明であると受

け取られたかぎりにおいては、もはやいちいち述べる必要はないであろう。すなわちこの事実の圧力は列強の悲しむべき過剰軍備に存しているのである。というのは、過剰軍備は長い間すでに「過剰技術」という現実を満たし、またそれに加えて、テロリズムという目に見えない脅しが軍備を拡張させているからである。そして、以上のことによってわれわれは、次のような印象を受けた。すなわち、一九八九年の民主化の結果、東西紛争の終結とヨーロッパの諸民族の統合を妨げていた、見えない防護シールドが破壊される一方で、同時に人間は不安感や抑鬱感に苛まれるようになったということである。そしてさらには、戦争を実行に移す際に越えなければならない敷居があったが、それがテロリストの攻撃の後では、もはや何の役にも立たないということが判明したということである。なぜならば、このことは社会政策的立場からの侵略者や国家の存立基盤が危険にさらされる脅しだけではなく、とくに国民としての誇りが傷ついてしまう集団的不安を誘発させる原因にもなるからである。それゆえ、事実の圧力

によって問われることは、これらの事実はとりわけ極端な意識の転換とそもそも調和されるのかどうかということである。

以上のことは三つ目の根拠、すなわち苦の圧力にも当てはまる。戦争においてはずっと以前から、人々は名状しがたい恐怖、不自由、苦しみにさらされてきた。それらはまず、いつになっても消えない死の不安に変わっていく。それは兵士たちを異常にさせ、さらに数多くの一般市民が巻き添えになり、とりわけ動物がこき使われ餓死したことはいうまでもない。またそれに劣らず甚だしいのは、心理的ダメージである。たとえば、情報はプロバガンダへ、真実は虚偽へ、道徳は傍若無人へ、人間性は野獣性と野蠻へと転じていくわけである。たしかに戦争においてはまた、一人の英雄の業績が輝くこともあるけれども、しかし兵役中には忌まわしいこともそれ以上によくあるのである。したがって苦の圧力を耐え忍ぶことの目的は、戦争をできるだけ早く終らせ、平和な生活を早く回復させることである。それではしかし、平和とは何であろうか。

機は払い除けられ、たとえ社会的・経済的差異に直面しても、人間が平和的な共同生活が自由にできるよう配慮されることになる。

しかしながら、なおさらに重要なのは転回ということである。というのは、転回によって平和は、対立するものが他にないということがその特徴である、あの最高理念の領域に位置づけられるからである。これについては、第一に、プラトンによって神性と同一視された善のアイデアについていえることであるが、同様に、真なるもの、美なるもの、自由についてもいえることである。善とは対立なきものとして考えられなければならないことは、悪を善の欠如として規定していた中世の形而上学によってすでに公認されていたことでもある。同様にして、偽は真理と対立しているものなのではなく、真理から反れたものであり、また醜は、それがたとえ美の対照的な上昇であっても、美と対立するものではない。同じことは自由と隷属状態についていえる。つまり、隷属状態とはたしかに自由が失われた状態を指すが、しかし自由と対立してい

二 転回

この問いは未解決のままでありつづけてはいるが、しかし一つの暫定的な答えとして、法皇ピウス十二世がこれまでの危険な時代におけるいわば紋銘として選び、平和への話し合いの基調となった、イザヤの有名な言葉すなわち「義は平和を造る」があげられるであろう。その言葉によれば、平和の礎石であり条件は義である。しかしその際に見落とされたのは、ヤコブが義の「基盤」が平和であり、また平和の「実」が義であると定めることによって、新約聖書的な意味での平和への使信が、『ヤコブの手紙』のなかでイザヤのものと逆の意味の文になっていることである。とはいっても、ヤコブの言葉が旧約聖書の原則以下のものではないことははっきりしている。というのは平和には、それを無秩序な状態へとしないためにも、基本構造としての原理、すなわち義が必要だからである。義は、その形成力によって、必要とされる平和秩序 (ordo pacis) の幕を開けるのである。このことによって無秩序の危

るものであるとはいえない。このことを踏まえていえば、戦争とは平和と対立しているものではなく、平和が失われた結果であることが明白となる。したがって、たとえトルストイの小説のタイトルであっても、古い時代に吹き込まれた軽率さによって「戦争と平和」と口にする者は、平和をすでに放棄しているのであり、平和の没落を助成しているのである。というのは、平和は、それに対立するものが考えられないという思考可能性の最高領域に定住しているものだからである。さらにこの頂点の領域はいわば神について考えることに等しく、すなわち神についてと同様にその領域についてはその本来的な意味において語られなければならないのであり、いわば神より以上のことまた神のほかに正しいものは考えられないのである。したがって、平和とは対立なきものであり、その混じりけのない純粹なる実在性として考えられなければならない。神には悪魔がないのと同様に、戦争は平和の反対でない。しかし神の思考に近づくことは平和に関する定義がないことを必然的に意味する。アウグスティヌスが長い

探求の末、平和を「秩序の平安」としてみなしたとき、彼は同時に平和の帰結を平和それ自体であると呼んだのであった。しかしながら新約聖書には、平和とはそれが出現するところで輝くという平和の証が示されている。ノアの洪水の後の七色の虹のように、神の天使の杖によって触れられた祭壇、ギデオンの上に「ヤーウェとは平和」という称号が与えられている。メシアによって提示される平和の王国において狼と羊が共存し、人間は剣を鋤に換え、槍をぶどう摘みのナイフに換えられるように、神の子の姿において平和の行く末が彼の双肩にかかり、そして彼の名は「平和の主」と称される。新約聖書的にいえば、神の子は人格的に具現化された平和なのであるから、彼以外の誰も平和をもたらすことはできないのである。

ところでイエスは平和を自らの生涯の課題であると理解している。というのは、いかなる犠牲を払ってまでもローマに対抗して独立戦争を挑んでいた狂信者の煽動にさらされていた民衆に対してさし迫ろうとしている破滅から救うために、彼は来たのだから。そして

イエスは、いかなる暴力も拒絶し無条件の愛という神の告知を示すことによって、またこれらの熱狂者の手から自分たちが戦う手段にしていた宗教的口実を叩き落すことによって、このことをなしたのである。しかし暴力はすでに渦巻いていた。だからイエスは自らを犠牲にして十字架についたのである。ヨハネス二三世をはじめとする前世紀の法皇たちが無条件の平和を支持することをいよいよもって強調したとき、彼らは同時にイエスの足跡を辿ろうとしたのである。しかしその足跡は、キリスト者の異教徒に対する暴力、そしてキリスト者同士間の暴力によって見分けがつかないほどに消えてしまったのではないだろうか。宗教戦争時代のキリスト教徒はイエスの背後に後ずさりし、取り返しのつかない結果を招いてしまったのではないだろうか。それにしてもなぜこのような事態になったのか。

三 暴力の介入

ニーチェがキリスト教に対してもっとも辛辣な批判をすることができたわけは、原始キリスト教において

すでに復讐というまったく福音的とは言えない情念が支配していたことを確信していたからである。このことは、キリスト教徒への迫害者に対して神が怒りをぶちまけたならば、黙示録が正当化されることになるということの意味する。というのも、テルトゥリアヌスが迫害者を恐れさす地獄の残酷さを描写したことを正当化するにいたったのもこの復讐という情念だったからである。これに影響されて、アウグスティヌスは異端者に対する暴力を支持することを承服したわけである。しかし同時に彼は、異端審問、追放、宗教戦争によって特徴付けられたキリスト教史のもっとも暗い章への扉を開いてしまった。ユダヤ教に対して度を過ぎたやり方で関わっていたことを教会がはじめて認めたのは、ここ最近の法皇の時代になってからであった。しかしキリスト教が血に塗られた暴力の時代にイスラム教と出会ったことは、ユダヤ教に対するキリスト教の関係のちょうど逆の関係にあった。というのは、イスラム教はその初期において剣の宗教として凱旋行進をしていたし、その結果キリスト教はさまざまな派

に引き裂かれてしまったわけであるし、またお互いがそれぞれ行なったことに対してひどい目にあってきたからである。イスラムの名で行われた九月十一日のテロは、このことをトラウマとして思い起こさせる。イスラム教との対決から現代の戦争以上の悪いことを引き起こさせないようにするためには、アブラハムの宗教間の関係を改めて考え直さなければならぬであろう。

四 相互理解のきざし

イスラム教はしかしその本来からして剣の宗教ではなく、聖書の宗教である。「権威の夜に」天から授けられたコーランには、イスラム教がムハンマドに下された神の啓示が記されている。このことは、イスラム教がユダヤ教とキリスト教とに結びついていることを意味する。しかしこれら三つの宗教は啓示宗教としては同じように理解しあっているけれども、啓示の解釈にあつては激しく対立しあっている。というのは、ユダヤの信仰によれば、神の啓示はモーセに律法として下されたものであるし、キリスト教にとっては、啓示

の仲介者は同時にその中身でもあるからである。したがって、「はじめに言葉があつた」の一節は、マール・マクラハンの「仲介者は使信である」という言葉によつて、そのもつとも現実的な解釈を手に入れることになった。以上のことからはっきりわかることは、その血で塗られた歴史にもかかわらず、アブラハムの宗教であるユダヤ教、キリスト教、イスラム教は、お互いに疎遠なのではなく、はるかに緊密に結びついているということである。

イスラエルは、超現世的であり同時に世界を包摂する神の觀念に關して、シラーが郷愁を以つて賞賛した、あらゆる星に神性を見、あらゆる泉にニユムベを見るという「ギリシャの神々」の多神教における人間觀に依存している。イスラム教は、この觀念を、神を賞賛する者を無限の力それ自体に結びつけ、信仰する者に驚くべき力を授ける神の唯一性の概念へと先鋭化した。これに対してキリスト教は、魅了と恐怖の間を揺れ動く神を愛と平和のなかにのみそれ自体として証明することができるといふ、絶對的に愛する者として露わに

五 平和能力の問題

平和の努力は、歴史があまりにも露骨に示しているように、人間の平和能力が疑わしいのではないかという暗礁に乗り上げてしまつてはいないだろうか。またこの能力は、今日の人類学者がいつているように、*homo necans* (殺す人) としての本源的な攻撃性が肉食獣としての人間に逆戻りすればするほど、疑わしいものになったといわなければならないだろうか。昨年の出来事からすれば、人間の平和能力は實際疑わしく、平和への準備は絶望的といわなければならないのだろうか。まさに平和の時代において戦争への欲望が膨らんではいないだろうか。

このような状況のなかで人類は絶滅してしまうかもしれないし、また人間は、トマス・アクイナスがすでに認めていたその無防備や無抵抗のゆえに、群れのなかでしか生き延びることはできないのである。したがって連帯感と親切心に頼らざるをえないことを別にすれば、以上の問題が基づいている必然的な前段階は、

することによつて、ユダヤ教とイスラム教の神觀念にはたらいっているアンビヴァレンスを乗り越えたのである。もしレッシングが、アブラハムの宗教がその真理を立証できるのは人道的行為と寛容さを競い合うことにおいてのみであると考えていたならば、今日これらの宗教にとつてより切迫した目標が明確になってくるであろう。つまり、平和、これである。その手始めとしての最良の方法は、お互いにもたらされた苦しみを「あがない」、今日の危機的状況の克服に尽力することではないだろうか。というのは、テロ攻撃とそれに対する報復とで生じた損傷は、悲惨な犠牲者や非難という悲しみを被つた人々だけが受けたのではなく、いやまして打撃を受けたのはほとんど手の届く範囲にあつた世界平和それ自体だからである。今日われわれに訴えかけるものはしたがって、これらの宗教の今までの抗争の歴史の終結を勝ち取り、合意と寛容をますます成長させる歴史を新たに始める覺悟をお互いに持つことではないだろうか。

《人間が悪くなるのは何によつてであるか》に答えることである。アウグスティヌスはふたたび、誰もが知っているパウロの原罪のテーゼを援用しながら、以上の問題に介入していったのである。しかしながらパウロは、まったく反対なことをそれも強調しながら述べている。「死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか」(「イコリ、一五・五五」)。そしてパウロは決定的なことを付け加える。「死のとげは罪である」(「イコリ、一五・五六」と。パウロによれば、死は罪へと駆り立てる。つまり悪への刺激は人間を死へとおとしめることである。このことが証明するのは殺人者の心理学以外のなものでもない。セバステイアン・ハフナーの鋭い分析によれば、大量殺人者ヒトラーは、スターリン・グラードでの敗北が確定した後、回避できない自らの死にできるだけ多くの人を巻き込もうとした。黙示録信奉者は、世界と時間の終わりを告げ、そしてそのことによつて自らの崇拜者に生きる可能性を否認するかぎり、觀念的ではあるけれども、同じ目的を追求していく。同様のことはしかし、憎し

みにもいえることであり、ヨハネの手紙には「兄弟を憎むものは皆、人殺しです」(Ⅰヨハネ、三・一五)と書かれている。というのは、自らの憎しみで他者の生活領域を抹消してしまうからである。いかにしてこのことを除くことができるのか。

六 神の子であること

神の子であるということが明らかにするのは、人間が死へとおとしめられることから解放されることによつてのみである。テロリストたちは、狭く閉鎖的な神との関係のなかで、死の不安を乗り越える一方で、思慮もなく殺人行為をしてしまう。しかし死を克服するための現実的宗教はキリスト教のみである。したがって、イエスの復活への信仰はキリスト教における遠き通るくらいに純粋な核心を形成しているのである。パウロがイエスを神の子として認めた復活もまたイエスがその生涯をかけて成し遂げたこともやはり、その核心であることはいうまでもない。つまり復活とは、神の子であることをイエス自身のものへと譲渡するた

めに、言葉と奇跡的效果によつて実行される試みなのである。したがって、復活した者は、「私は生きている。お前たちも生きるであろう」と断言できるのである。イエスは、死へとおとしめられることから自分のものを根本的に解放させるために、自らのものを神との系譜的な関係へと押しこめたのである。これが神の子であることの意味である。神の子であることはキリスト教的人間学をもっとも明敏に表現するものとして適用されるべきものであり、そして神の子であることに對する最良の研究に尽力したニコラウス・クザーヌスが想起されるべきである。というのは、現代の状況を見るにつけてもなおいっそう、彼の思想はあらためて発掘されなければならないからである。

七 不安の克服

しかし平和のメッセージの前にはまだもう一つの障害が立ちはだかつている。すなわち、テロリストの脅威がさまざまな病的状態へと人々を導くという不安である。それどころかその不安は、平和運動への動機付

けそのもののなかにすでに忍び込んでいるのである。というのは、ある分析によれば、たくさんの平和行動家が自己欺瞞に陥っているために、彼らが運動に参加し、また平和を求める行動の背後には、自分一人になつてもやっていけるのかという不安が隠れていることはめずらしくないからである。この不安は集団的不安として全集団の個々人へと蔓延するやいなや、無秩序な状態としてますます広がっていくのである。不安はさらに、人々を麻痺の状態へ陥らせ、知力も意志の力も衰えさせてしまうために、ほんとうにどんなことでもやりかねない無分別な状態へといたらしめる。その一方で不安は、差し迫った危機やその可能性を現実的に判断できないという消耗性疾患の原因にもなる。したがって、あらゆる精神不安が蔓延し、突然に抑制が効かなくなつて攻撃的になったり、その結果ますます人々は破滅へと追い込まれていくわけである。

聖書の原史には三様の樂園喪失が描かれている。すなわち、墮罪において人間は神の加護のなかでの原初的安全性という樂園を喪失し、最初の兄弟殺しでは兄

弟の絆という樂園を喪失し、バベルの塔においては言語的理解という樂園を喪失した。ヘッカーは「人間とは何か」(ハイデガーは嘲笑したが)において、「大バビロンはたんなる思いつきにすぎないが、しかし本当はわれわれのバビロンのな心のように強大で法外なものである」という句を引用している。それによれば、人間はまずはじめに、神との根源的な関係を失い、次には同胞との関係、そして三番目に自己自身との関係を失つたことになる。これこそが不安の作用なのである。つまり不安は、人間を神から離反させ、同胞との繋がりを疎遠にし、そして実存的不安として自己自身を喪失させるのである。しかし、人間が神の子であることに達するに依じて、これら三つの暗い影は人間から取り除かれる。すなわち神への不安という影が取り除かれるのは、人間が愛する父の心胸へと自らが導かれることを知るからであり、社会不安の影は、人間が他者において自己自身の似姿を認め、他者を神が指名したパートナーであることを認めることによつて取り除かれ、最後に実存的不安は、神から人間に注がれた

愛によって、自己分裂の傷が癒されることによって取り除かれる。

同様に、人間から原初の麻痺も取り除かれるので、イエスの生き方が自分に受け継がれ、奉仕者としてのまた介助者としての自己を伝えていく行為の能力が付与されていることを人間は知ることになる。しかしこの行為は、平和を創造する者たちが称えられる福音によれば、第一にイエスが平和の証人であることに基づいている。したがって、新しい平和意識は、神の子であることに達した者の自覚に帰せられるわけである。そしてその者には次のことがわかるはずである。すなわち人間は平和以上のことが考えられなかったこと、また人間に平和以上のことは与えられなかったこと、しかし人間から平和以上のことは代償として要求されなかったことである。その者は神の子として自分自身に服従することは一度もなかったし、しかしだからといっていかなる人にも何かを負っているわけではけつてない。新約聖書はここにきてその省察の最高段階に達し、次の聖句を記述する。すなわち「御父がどれ

ほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどに、事実また、そのとおりです」(ヨハネ、三・一)。ニュッサのグレゴリウスは、「人間は死すべき者から不死なる者へ、人間から神へとなっていく者なのであるから、人間は自らの本性をはるかに越えていくのである」といつている。しかし人間は自分独自の心のなかにある隔壁を取り払うことによって、グレゴリウスが平和を規定するものとして述べた、「人間における愛に満ちた一致」を掲げる平和の創始者になっていくのである。アブラハムの宗教が信仰者にこの原則をもたらし、活動する平和の証人へとならしめる試みほど時宜を得たものはないのではないだろうか。というのは、これこそが危機に面した世界平和を、始まったばかりの世紀において救済する、もつとも確実な道であると思うからである。

八 平和だけが世界を救う

イスラエルからほとんど毎日のように届く恐怖と荒

廃の光景を見ると、なにか夢を見ているような気分になる。預言者イザヤが「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」(イザヤ、二・四)と約束するのは、「ひとりのみどり児がわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられて」(イザヤ、九・五)いるからである。またさらに、約束された者は『ヨハネ福音書』で「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」(ヨハネ、一四・二七)と語っている。以上からキリスト教の平和解釈の要約ともいうべき句が『エフェソの信徒への手紙』から導かれる、すなわち「実に、キリストはわたしたちの平和であります」(エフェソ、二・一四)。そのうえ預言者はイエス自身と同様、幻覚を見ていたわけではない。両者はおそらく知っていたのである、恐ろしい光景によって具体的に表されているのは、憎しみ、暴力そしてテロが相手をますます深刻な破壊へと陥れるだけなのだとい

うことを。だから公会議を召集した、あの忘れられない法皇ヨハネス二三世は平和の回勅『地に平和を』(Pacem in terris)のなかで、次のように述べて人類の魂に訴えたのである。「今日の武力からすれば、政治的、経済的、社会的紛争を解決する手段として戦争を考えてはならない」、今日この言葉ほど現実味を帯びて響いていく言葉はない。というのは、一九八九年の自由の夜明けに続いて、血が染み込んだヨーロッパの大地にヨーロッパという家が建ち、平和の島から平和の電波が全世界に発信させることが期待されたからである。しかしこの平和は、世界経済の中心へのテロリストの攻撃とそれに対するアメリカの対応によって、いかに克服されるか見当もつかない報復攻撃へと代わってしまった。

九 苦の圧力

以上のような出来事は、平和の意味を新しく考えることを要求するがしかし、その意味が獲得され提示されるのは、相対的なものが他にないという絶対性にお

いてでなければならぬ。周知のようにテレビでは、まったくひどい事実であつても美化され、観察者は少し身の毛のよだつことであつても、それ相応の衝撃を与えないという効果がある。したがって、兵士の死への不安、傷ついた者や死にゆく者の苦しみ、遺族や孤児たちの嘆き、またこのようなことで引き起こされる人間の辱めや残酷さは消されてしまうわけである。だから、平和を求めることには苦の強大な圧力がのしかかっているのであつて、それに付加されているのが大きな意味の圧力なのである。とくに戦争が終つたとき、衝撃的な表現で失われた平和が嘆かれ、戦闘の恐怖や戦争という火の嵐のなかで人間の尊厳が失われることが叫ばれるが、しかしそれだけでは不十分である。つまり、ニコラウス・クザヌスやイマヌエル・カントのように自分達の思想の頂点で主張してきた平和の思想家たちが、情熱的にかつ鋭敏に平和への願いを表明してきたけれども、それでもやはり、彼らは、いかなる平和であつても新しい戦争の後にやってくるという経験則に屈したために平和は希望と理念の王国に押

しやられてしまったわけである。それだからますます、平和をいかに考えなければならぬのかを、今日の状況からして問わなければならない。

十 命令としての平和

カントによれば、平和を志向する民衆は「われわれのもとでは戦争は起こさせない」ことを決心する。それでもやはり、新しい戦争が起こる可能性は依然として残っている。トルストイの有名なタイトル『戦争と平和』を口にする者は、すでに平和を戦争へとおとしめているのである。というのは、平和とは、さまざまに夢物語が次々と現実になっていくという現代のなかであつて、全力をあげて実現させなければならぬのであり、それは単に人類の空想を意味しているのではないからである。つまり平和とは、真理、自由、善の理念と同様に、対立するものを他に付加することができないものであり、したがって相対的とか条件的とかという次元では考えることのできない、人間の理念の頂点に属するものである。それゆえに、新約聖

書は、ピウス十二世が紋銘として選んだイザヤの言葉すなわち「義は平和を造る」を逆の意味に変え、平和の「実」と結果に対する義を説いたのである。これは、平和が他の最高概念と同じように、無条件に絶対的なものとして考えられるべきものであり、実現に向けて努力されるべきものであることを意味している。

十一 平和を創造する能力

憎しみ、復讐、暴力へと向う者であつても、はたして平和を創造する能力を持っているのだろうか。よくいわれるように、破壊された家や荒廃した街が彼らの魂の鏡像であるならば、彼らがその能力を持っていることはきわめて疑わしいことである。彼らが平和を創造する能力を持っていないことには多くの理由がある。そのなかでもっとも深刻な理由は、まさにこの現代に蔓延していることでもわかるように、不安なのである。というのは、不安は人々を麻痺させ、孤立させるので、不安に駆られる者は周りの人々との接触を失い、口数が少なくなり、無力になってしまうからである。彼ら

は窮地に陥り、生存権を脅かされるが、彼らは気まぐれであり、しかも攻撃的になる。したがって、人間を平和へと向わせ、人間に平和を造る能力を持たせるには、不安を克服しなければならないだろう。つまり望まれるべきはまさにその核心から把握されたキリスト教なのである。だから教会は不安を取り除く教育を完成させ、良心に対する不安、罪に対する不安、地獄に対する不安を教示することによって、人間に教会の教えを受け入れさせようとしたのである。つまりキリスト教はその起源からして不安を克服するための宗教なのである。

目に見えて倍増していく不安のすべてのかたちは信仰によつても取り除けないのであつて、つまり三つの根本的な不安が残っている。すなわち神への不安、同胞に対する不安、自己自身に対する不安である。神とともに現存在の基本的な支えを失つてしまうのではないかという危惧は、無条件に愛する神の福音によつて解消し、同胞に対する不安は隣人愛の掟によつて解消し、実存の不安は神の子であると任ぜられることによ

って解消する。このことは「山上の垂訓」の最後の言葉（真福八端の最後の一節）「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ、五・九）に結びつく。神の子の位置へと高められたと感じる者は、自らが平和を創造する能力を有していること、平和を造る義務があることを知る。「神の子であるという恩寵の冠」を冠せられた人は、カッパドキアの神学者ニュッサのグレゴリウスがすでに断定しているように、まことに平和を創造する資格のある者なのである。それゆえ、復活した者が初めに語った言葉、それは聖夜にまで照り返されるものであるが、次のように言われる、「恐れてはならない」。この言葉が意味することを『ヨハネの手紙一』の次の一節が語っている、すなわち「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します」（ヨハネ、四・一八）。

十二 平和を創造する共同作業

一つの機関あるいは宗教によってではなく、あらゆるものの共同作業という方法によってのみ果たすこと

ができる課題がある。したがってキリスト教は「平和の福音」という義務を負っているのであるから、ともに働くことのできるパートナーを見つけなければならぬ。そのパートナーとして第一に打ってつけなのは仏教である。というのは、仏陀は、サンガの修行者の言葉によれば、人間の暴力と苦しみ満ちている状態から現存在を解放し、苦のない安穏な道へと導くことを試みたからである。しかしキリスト教は同時に、神への信仰と啓示に対する信仰によって、とくにユダヤ教とイスラム教に親近感を抱いている。しかしながらこれら「アブラハムの宗教」の間の関係は、数世紀前から第二次世界大戦の恐怖のシナリオにいたるまで、残酷な迫害と紛争の象徴であった。しかし現代においては、これらの宗教はともに、広大に蔓延している無神論に対抗して、自分たちのすべての力を集中させてその力を振り絞って挑戦しようとしている。しかしこれらの宗教が信頼関係にあるためには、過去の争いを調停し自分たちに共通の神への信仰という贈り物の寛容性と相互理解という行為によって自分たちの姿を示す

覚悟があることを世界に証明しなくてはならないであろう。というのは、これらの宗教は、この前提のもとでのみ、無神論的環境に対して、自分たちのメッセージが危機的で常に脅かされている状態から世界を解放させることが可能であることを証明することができるからである。しかしこれらの宗教のすべての力を結集させるには、共通の目標を立てることが必要である。このことはたしかに、世界平和という時代的に要請されている目的と比べると現実的でないかもしれない。しかしながら、これらの宗教は自分たちの歴史には負い目をもっているけれども、自らが平和の使者であることをその内面から確信すべきであろう。そしてこのことを明示するために、これらの宗教は自分たちの全力を結集させ共通の目標を持つことを自らの信仰者に自覚させるべきではないだろうか。

（オイゲン・ビーザー／ミュンヘン大学教授）
（訳・やまざき たつや／東洋哲学研究所研究員）